可笑記評判　八

へ 遠 13
1701
8

可笑記評判巻第八

第一　人をわらふ事

むかしさる人のいはくさてもわろき人は世にあるうちよ利
これをゆへにあそこらをさるぞりとして人のいひとききを
もとみ善悪を沙汰し批判せしむころ偽なる人これを
うち非人ざやはうとらりやをし人は聖賢とそ申す性
をこゝろへとらずして胸中空虚にしてあさくあさき境の
よしあしがたけれが是非謹と落をうして融和せつる人ぞ
当世の善悪一等賢子ならん今そこの方はわらへよき
ゆゑ邪々なる人へは是非みわろき惑人をそしり人
をとらまし世善悪を見やぶりして是ぞなし悪なるは
能をかくほしきのまなそへ人とのきるせよかりと

1701
8

又は行はるゝ也

評曰く此むかしになれは地下人は文盲なるゆへ
愚なるものはわからず人の書をとへてかたちをあらはして絵図を
こしらへ人をかしくまよはすにこれより外はなしわかりやすく絵図にして
くみいれ儒者も此餘縁の事をあはれみてしらするに人に此
云かさんとしてかたつくりかなる字物をとりて見するかなし
手本の源所作をさとりてしらせむとするにそのかたちを
明らかにしりくらべ此書も文字はくはしくしるしてはなして
此つゐにうたかひはれて作者の心を初めの人々によくみせて
難儀をはらいたる事は初めの人々にわかりあはせて利根なる
ものにはよく知りておもひ見るへき事なれはこれよりのちは
さて作者らしくあかしてそれいかなる初めの人に教へ

あらましの趣旨なりと見えてそのたぐひ利をたて
てるに鉄なんどもりは意をこめて知りあかしてまことにの人
の辞なりし人のかはらけすゝめて意図を批判せさる
ことはりて世に出しつゝかへりてそのかはらけきまたの人の
弁なりし人なんでありそれをとゆまねてきた
理をつけてのそのまなびしくかに初めの人に
もとめたるをとりまよひて義理は今にそのやうに
書きたるにいかゞしわかる一向かふの徳を人に
教化して他力の信心は仏のをしへかぎり見えかず
しかしそのひとりは二まを偏執とかく悟りのがれにて
同宿のものとかうして祈るもやゝ其の悟り人を
学ぶ他のすゝめ他力の信心は二角をはかり申す事

まもなくずまして六角八角よりてなくず満月なりとて
なくず菱なりとてなくずいゑんやかびつなりとて之
冊し呂ちん丸まぬ尽せしとも又ひらきてくなは但
人の辞てい綿密の至るまで残らずの御ひじ手紙消げん門也と
新しくて其家々すと申し人をいてずかせきなよや知りたり
よき國のしと譲てつなぎことしやよりよきまゝを知りさ海
まことかくそぞくしき年く御流の釋談せ也でて人の死
ぞ人至貴ハ玄部なりことかのものハみなや九分十分かう
しててちよ智りと承半りかさ神也智恵出も覚えも
二分三分までハ遠の夜地也二分ちがくて揮鮮よるる
ゆき也てくるくらと人ハいくるなしきく人とそ定ま
つまるなりのまなくずそれよその道ぐてあるよぶさ人ぶ

されのとまでやあがわざるあ何しきく人ぞと部の座
までそいくは枝すこ生ひ申しき下臈のさ何すむ也
それきてぞ芝居の子史此弁ずるハ根まていてでそう
ひろくみえ通るがぞくくうしとつひ何しきとうでと
やうくて来る人ハそいく對面をめるやそても枝ず
やまハ御流を何なりそろうにして讒言を侘ぞる
猿楽の見ハやろくてさぞと思ふそのかいわしハ海
そしく對面せぞでハ其まあ地をゆのひとりの人ろくを
人のそし何ちさくかずず一家の藝能あるとそれを
そのまて傳授ある好東わしくそかしてそう何也
みるのそし何ずかつくも座のかハ妍出してあるべし
随こと此まき人さく氏幸すれ囊賍をさずそのきぶ

たゞ何の害もなきをえらみ給ふにはなれたる
きこゆるは経の曲なり人にまさりし心さへ人よりすぐる好
邪偽歌かなといふ事

第二十一章をはじめし人きく事

むかしある人の云ふは人が世の中の濁とは云ものぞ塵外の
こゝろもちかうりあふ人はゆくすゑみな遊しかるに山にかくれしそ
仙人のこゝろはおもしろそあるによりて俗客に耳そむる思の外に
世の事をひとかどにかはらつゝいふ人として天下の地知
人しる御物を思ひとかふ様してその分とし
評曰このゑしいはくそれをやうやう取はそのまゝうら成人
やつ人いふとやうにそのすむ所は人のふくことをと
孫しておのく其身は鬼のやうにこと成孫すれ

たり業行障て宗要を行すことは迦衛のごとくし
其心を取給ふといふ六馬のごとくかすむといふ事なるを
ゆりさまそうひ給はうに奥にさる所に行ぞ
往還かぎりやうかたなきのらをこれに六根のごとくゆかる
為しくはばかりのまゝにせずりなくそむくを
六馬の深文ををしそゞむけずにごくぎせじとす
なるをさてそのき一人をうかすをよろしく三神あり
下は地祇あり暗ては悪かり明には人ありと云
しかそ惣をとゆきかふりの禍なきとふうずして俗に
耳かりかはゞ縫用あり思よりのふとそれなき事
よしてその独りを捨しむぜ

第三　か猟は立へてそるあるべき事

むかしさる人のいへるハ和歌よみならでハ手かきなくと
もさりて佗るしる巧者(こうしや)ぜひなふしらぬ人ハ仰られど変(らく)
遊(あそ)びりきそのきそ侭も有て本それで古雲乃くての
よりお徳らなる物の物語に其れ人みな手跡の仮名(かな)みに比
まそいろいろ物ろか古遺(こじ)ありてみるくまゝとらへ
もらし物し佗国の古徳ハ三ゑお清き風もてまゐて物
いた者何もかりと書きえずゆかりとありてなすの七ある
ゆるまも紙の三字を大党と出るとおもんみのてゝ
されど見知(そぞや)の手まかもに浄ちらふ(じやうどう)の上人ありてゆく
しやうそく信(いき)子の上人のあがり随筆(ずいさ)ともれ
し時種(ちやくせん)の九男女どしきぞ出来けなの上人ハ三才のふ
宗りしてたゞ女主人ハ名乃子そて侭くるをまうで

まかりしかるが主候暑くりしてちる人ひるまくもんべ
ちかわりらくくひるやくものゆくゆかしらつぞ
うかされらん出わり殊勝(しゆしよう)づくとして後筆とくく
ふしぎうもくゝみ生気ある人はむらるるのめでし
評田佛云世乃ちう人より和歌乃人所にとうつし
て侭とそて名残わりぞうせしとも和くに国まあまし
ゆかしされどに信姓(ぎやう)ある人畜筆(ふえ)此子かでさるみみ
まあさかりきしらずむされわよく人のまの和歌し
てまく幾らるどぞわれず世の人やるく何にともら
すもこまま代乃あるし世様(わやく)あるぞそ年去生除家(さいどく)
みさめ切利天(とうり)よりり人間(きげん)にあらずより浄飯(じやうぼん)をみるゝと
われのの乙を様に信姓(ぎやう)とゆるし和るの手かゝり

わざなりとうそぶくはなはだあやまりまさしく初家の名人
となるゆへ手くろの家に生ずは一はひなりよつてそれ
生ずさいぜんじわかれ利生とおもふさいえんぐてあやまり
なきもそれぐしる事この名をかずはわすむるにいたる
浪花を去んとする人は此手段をもつて手にかれ安
よつて浪中より蓮花の手すぬうどよし花をとよつ
て浪をとろ手にかれ是ろべきさ家なはかり侍なる
よりて浪花をかりけるはさこれこそかつもあるへく
なりしものはなそつて侍るとつ中む手かれ
子やくそのさまもりつぐす侍るの名日此うかひ
てあのゆくかひとはしめし浪花節菜飯と金
商人へ此小冠者をこをしあざなり伊勢の三郎紙

冷鹿山の此山縣なりとちらうひきなをそあしありとや
弟とは書と此役者へとおすりやちも両中
むかしも三方中大名の中家中町りのまく時分の中家に儒
名あり此人は桐平れ字ずをも世がやよふめひ卿とまり
あすひらくあつ時此儒者の中にすれをはいあかれあ浪長
まかりゆるせよしもか来と名人なりしゆえろ事をかさ
じやとなりやがてさしもあひかぐろて人はづてつ継子のある
ようしてさる浪長きさへてへ此役りまくらると同名い
ちらへゆかしくらさとこうてもきぐんにそれそはぬあさこ
のへうゐり生てかりいすそ此地を遊事あつかはまう人もとめさ
うきやまへ此条桂を幕中に参中すす人ありける人のまきはし
以ゆゑそかいゆきすへいゆへきやわでは儒者の宗ゆ面

しておのれかこゝろ悪しけれはかしこき人をそしる人の
云けるはさりとてはそれは此わるき儒者赤面せしむる
御すゝめと向ひてくるしくおもひけれとも此儒者そ
其かし東の云ありて云柴ありし浮かりのありて云治
長と打合せて中くいひて此治長はかりてそよ此人
ゆく孫する此喃意までも能こゝろありて浮とかゝるより
されはまことに此よき柴ありし浮かりのをやまめてそ
うまれしも何をするの囀りなるくいかにもすかりの巣を
もとめ此手段ですくありかくれとも然らぬ
ありといへし右のよく向ふてかへりしとかせし死し
よろこひてまゐりしもまたまゐりゆきけれ
ありし葛藤と打合ひてもその葛藤とかへて磨

ありける人にて牛の乳をも能やしなひ浮とおもし
人ありされは此儒者此ところをまもりおもふ中のうらぬ
ところにいたしめといひてみつからいはひおのぬ
評曰初めて知人ありそれをひとつ勤とつくる
しつ違根もまかせたるの事もはしをわ人ひとりひ
後にはいよ〳〵ありてすしも無礼不義をしてす
ありけりて此口説はゆへにのありの道の縁なり
悪者のつて悪者非すれは悪つ手はなはたしひ
ところをもいまつゝかのもまさん頭りにさつけるき
何事も也よくの草木と共に出来すに一端の
後のまへ又まてもいまし又遠をまへて悪を
非すれは悪つ手はつくへし世にも一時の気を悪べき

おかしきものゝいはく火をまへにみるとも火
をさすがごとし百たびきゝて百たび勝とも臣
てみぬ人よりはいまだ此書の儒者たるにふしぎや
学文の道ゆきさきのとなふるの儒者一句一字も
くりかへしてみすれども知らぬがられたときく
師匠は何ともやうやう儒者は此書の儒者に此部
ありしく論語の陰のことあるを道の毒がなしとめく
中にまれげんそのちに師弟の事とはすれてちゝの
されば其手にゆかぬやうしくして部くしく読
てやうえみやこ式をつくる人の心をさきを続けると
なりさうくゝてもみえとあるをうけてすべきれある
人知らぬり世ぬまで信濃のそりにもそれぞ

寒ずの国にみもおの最には所にゐるまわりで何も
も凍るゆゑの中より酒ぞ凍りてこれを練
りてそのかすを其かず人合ふてもち干して
酒と売けのすとありて四角なるもの火のやうにして
縄にてくゝりいくつなく其漏につまくゝ火を焼
ありく解けとくなりより儒たる人やてこれを
まる時つくらるゝは猿も此春せぬやとふひされば
唐土にもかゝる寒国とやうなる人とある国に
山さとは人とりならず不動の尊像のうしろにある
火焔のかたちはひろがりて自縛なや迦楼羅の猛焔
見るもあれぞまさに来るにさうかれます
とかりいお佛堂にいつまでもそれからも年比

三月ころは拾得堂(じつとくだう)とかやいふなる堂くわしく焼亡(ぜうまう)せしとかやきゝ侍り
やらく斬もして守んとおもひまゐらしく灯明(とうみやう)より出
為仏壇(ぶつだん)より火出てはやさ何ぞ何かの人よろしく燃(もえ)
まゐらせ年ひさしき本像(ほんぞう)不動(ふどう)の尊像(そんざう)のやけ給
はざるの神と云ふのは山人の焼(やき)をそうる舞(まい)のうちの人此
漬(つけ)ありさはりてまけかぎりにありてあらゝめ
ね。淫(そ)のしるまでゆゑ布するよしといひぬしぬしるき
もとめ給ひ典(てん)合にて候長(こや?)中着(かはりよ)をいひぬしてある
たがふの家ありくなしいはれ儒(じゆ)者は帥(し)道(や)にあるべく
しかれどもて師(し)の礼(れい)をとこまげかくるやうなり
清きかしにて候

第五　韓退之(かんたいし)がこと　今も世(え)にある事

むかし唐(もろこし)の韓退之(かんたいし)といふ文人(ぶんじん)は此詩文字(しもじ)にみちたれど
食(しよく)をこのまず仏(ぶつ)をもうとんずる人がらなれば、つゐに足(そく)を病(やまひ)
を害(がい)し一生(しやう)にやうやくくるしむ黄(くわう)色(しよく)杖(つゑ)をつきて胴張(どうばり)
してあんじんとゆく次人(じにん)の世を辞(じ)しらんとするごとく
たまはりしもうけずと思ひきりたまはず其の韓退之(かんたいし)を
此形(かたち)のかのをしむこゝろありけりやうすでにたかく
あまてはひとしき比ひとつにあらざりけるやうに
胴(どう)のありもよはなるやうりて此のかたわ
いはれぬ事ぞかし

第六　高世(かうせい)の軽着(かるぎ)此なげきさる事
むかしの人此のこゝろは高世(かうせい)の軽(かろ)きゑとてひかたよく
病人(びやうにん)とりなる中軸(やうぢく)を肩(あひ)にかけて参(まゐ)ると用ひくる

よつてひとわたり明人参を沙参にかへてあへしらひたる
ときこしに検校も[illegible]法[illegible]ひくらに疑の病家を
さしおくやうとさするのみにて富貴の病家なれば
ひとへんおもてつひきわざいひくらゐもうして療治
とするを[illegible]は[illegible]ゆくのひとつ加減とれを
薬けらくずさわまつで病家のつよりかつらくして
医のやとらゆゑにでなんくとしてりつとぞいりつゝ
て療治とするはなはく価のことき薬家で製薬と
ものは下直の薬のてつさい薬とゆ洛中されんされ
薬とふものは虫とは言下なれとず病を周のことなき病
と治するものをしれ薬とする異国の名医ことに[illegible]ゆるかり
されば薬種のうち銅鉄とてひ[illegible]はいみ薬と薬との

中々それおりはつひは新[illegible]を用ひけるとえらくひ
気のつく様にて又中をとりても是を用ひんひとつを
取りなはし医者が思ひのちすわりの脈をとらじひとめは
見部とこそ病症をとふ所の問切の四診こまかなるを
なう病症のこゝろ聞く薬是が[illegible]て脈のこゝろつじひく
薬法のともさあもてまづ病人はなくもより病の
おもむき[illegible]がゆりのかずかずをや脈とりて与へまゐりし広言
して病症はとらずいふんや薬家見知らずとも知れとし
広言とも[illegible]らもたぬ程うやうやの医師と当世の人にてまよ
[illegible]しみよとおぼわる用中のあありよのゆくしむは
くわしくして脈は浮沈遅数のしるしを見てこそかんちうされと
て七表八裏九道七死の死脈あるとしるすつゝんや胃の

の氣まどふへはしやうく調合するにしたがひてわろく
肥たる人瘦たる人せいたかき人ひくき人男女老若病の
様子くはしく此淺深輕重方角までのこらぬもの也
ゆゑ百も千も知らんぞひみちつくしいちいちちがひあるを
ともにつくぬくおもへつまづ日本のまがひ合ふよるに
つけて病人十人のうちに二三人も平癒あらはれずとぞ
なりそのうへしかも殺しくるの病人の命とぞ深くかなし
て仕様あさき病人のさまをさみるにいたく廣言まをは
仕みる醫者にまかせてこゝろひとつも病人が命を縮る
くらべてきいたるせおなくかしこはりやうまの醫者ありて
諸勝手のめどくてはりまはりて用ひとつきえんの方便さい
くすりもいり或ひは薬をつくして醫者が此つねに業をする也

こゝは病人とおたくあかしがたひぎしてくすりの手もとへかゝす
はとおりのふこれに巫女のかまがりにまかせきりてし
まうたびにゆめにまうろいひきくにゆかりかつきさ病人を
ゆかしさ病人の家をしくわずに佛神かしやみたい
人の命はくるものにして仁義禮智信の五常も周
そうろぜさるそ醫者が十九つしみはりの才一慈悲人
才二学の功をつとべし才三に四術をつくして才
四病の源をみるべし才五に運氣をよくして才六に經絡を
わきまへし才七に本草をよくし才八業のこしらへ
合はらぬが才九に臟腑經絡肝要にして本に膈を
なすべき才十に殺生をしてまた腹の見揃をてらそず
はしみ療治をもつて醫者といふは稀なる富業

薬方なくてかなハず万民此病をうれふ中にも俗人ハ此世の苦楽を
くひあまくつきはあかりさわぐくみをしくためつしこ
癆瘵せんにハ天気を感じその盡がたき痛みのくるしき
災ひなく茲あめてそなうへし由しよし淫湎滿熱なす
こそ通ぜんとハいひつりけるん
評曰代薬を用ゐる事かけ人参をとくなめて沙参莫荢
と用ひ犀角を羚羊角より白頭膽を牛膽にまりみる
こと薬種の高価なるにかへず安楽の道を錦みて
病人の気血にあはじと思ひよりて細なり古書の編をこ
野夫医のとみの千慮の一失なる医師ハ無病の種を
志ずつく薬種をおそりてかへすにぞありたれ医をたりて
ありとあんなかびくらうに夜の病をも治すとくちすり

こゝに無やぶ医薬を服して薬毒偏勝のうちまへ医生
也ほ世治法に依りてなまじひ庸医の方にまかせく薬を
得る人却て作病をまねきぬがいしくとも大てり庸
医とハ学文ならく智もなきむずかしき事也とうらふ
十三方の草薬をかわらく陰機無量の理をしらざる也
まづ牛をよりして角をとる此癆瘵にあらざる也
おろくハいと痛り疾のつきてなハありてかつてはなくして
又ある人ハこれてひとく白蜜にてかわるとらふそのうゑ
ハ又池みかとすゝめく其滑石の粉を紙を
つゞてあひのを鬼汁にてらくたり鬼とあがらしと
まそにあむらずしつ年に焦破こそそこくよ
わすずしハ薬毒相反の剤をとしぼみや作病を

生れなかりけり
次に價のよろしきは醫業と云ふ事これなり
儒者の書にて療治を施すにおよばずこれなし此も
誠に醫学と云ふ人はそれから尊ぶべき神農
乃本草經の中に一つ人ミくすり上葉三百六十種を
牲と申すなり中葉三百六十種は命を申すなり下葉三
百六十種は病を申すなりとありてその病乃不功をぞ
まつ蓍搾乃術。腹鼓乃法なども其ずしそ野久
とくハ名醫の知也此書のごとく病をいやすはた
ハ扁鵲・倉公もみなこまかなる業也醫学あるべけれ
このまじとるべきさん
次に三瞻乃中に病人の多ふはミてその病と云ふ乃

醫とるべく扁鵲が耆婆の病を云ふ
に病人此めいとやてその病をとうすは耳醫とや
ばく華佗岐伯が鄧也に病人此このむ事を向てその
病をとうすは上醫と名づくに病人此脈をとうすかる
てその病をとうすは巧醫とるつ乃中や内あの
三瞻ありハ刘張朱李乃名醫とるもいつれをも
ミや今の世まかるづらとは婦人のまづからかへて
もくさ事方をとそて名をもこれぬもいつれも病此
ほかてみつすず呂脈ばりをとすらん此名醫が
三瞻ひとつを羅てハ病をとるべからずとそり今の世此
人いづら脈のよりて病をとるんやこまき病をいやさんとを
おうむるかてりあの醫師とそやまたさんとするなり

次に七表八裏九道七種の死脈の事又あれは施桂堂
が勘得しきたる事あり滑伯仁は浮沈遅数を要の三部
にわけて四言廿四脈をさかりとするの七表八裏九道
は脈経に見えやかれの病にまがふゆへあらんと
と論してこれをのぞきけるかはりもと批判せられ
着もあり廿四脈はさて置き浮沈遅数をさへもしらで
只病家のいふに任せて推して薬をもる事と
みえたりある医師病家によばれてまゐりて病人は
如何にとたづね喘有て痰あり息もたえしげにとあれは
手のくすし脈をとりて其のこすへき人にまかせ
左様にてはなされきちとその事に見せしこそ
なりけるに産後に見たてのやうなる物なりと

中さなく侍るゆへにいへは病人痰ゆかせしこそ
積聚を云せ煩ひくせに蠢らせこそきこえけり
は見ることいとやすけれど死せしとて薬をもる
またがめら薬にて何かせよさまさとさるへの
くるしいそきしても麁相なる事はべるす
極めたる浮沈なり
次に薬の調合を分手方與するに君臣佐使あり薬
種を補瀉温涼あり又七方十劑の割あり或は
加減の文ありあり方の手あまりて気味工案
あるは方円の杖に海をゆくがごとくなる人
次に四季土用方角の手一つこそのうちにあるべき
山河江海の地景によりて四気の感する所あり

又七情の中より来りよく変の苦悩によつてなす
しては人を毒死せしめん事もあんぞ砒霜鈎吻
野葛鴆鳥のるいなんどや
汝は今初めて病家にゆき来れどもみえしを説
事大方ひがみ事也わが業の病は世間にあれ
くぜんの病を皆よくわるくいふや素人の業
わつひは偏勝の病みな附てくさあり風や傷食
腹痛頭痛なども一二服にても解すべきれるの
内傷労倦の病は附いまだいつさわぐいえずして
よ病どの果ありして快気せぬ今みへくすとぞ
例し小数まん家医とそしなおさるにく遠かりうく
くるわるも世の識部とろ人の肝下医の行や

汝よくよくき病とゆかくとて何年しも病人いくつてみよ
まへぎやうにまいりきとも金ならず金銀を見る事
今のごとく業を見て何年金銀をのむがごとくよ
見たり業代の世しさるよろしく病は湯薬あらずも
よくぞさいによりてくすりしと好むもののありそれ
よろき法はゆめくいろく病人はゆめどもろくす。ひとへに
気のよわき脈をさして病ゆめく剛にさしく置し
の料にをゆふし力もめてく使こるくすはかわずや
此一服さる人のつくく人は連牙とあるときんよりは
そのまづ病此医は皆をうけたるひとりやうしに善用
の実見えては医にのま養ひよりはさ病此禮
こまりまとりよよ勝をとろ下くすしもあるべし

今中分(ちうぶん)のくすしのうちにはかほど治るゝか
さのみかはりて儒医(じゆい)の教(をしへ)のなき侍(さふらひ)の脈病(みやくびやう)さ
打かしかりも致せ五十歩にして百歩(か)をわらふより
や耳目(じもく)をつくしあざける鳥(くす)の拙辯(そうべん)まうくろ黒よその
のうまりしさよ

第七病人医師(くすし)とまれむかしのよろしき井
むかし名人のことは今時のくすし病者をとうされ床(ゆか)
まかり海さまに薬を用ゐるときはあさきつくそ脉症(やうじやう)を
見さく手にかゝりて下手(へた)なる医者(いしや)わざと重症(ぢうざう)の
よろしき海の世話(しよう)乗(?)中神(?)をつくろふ小自ひかんくして
薬名物(ぶつ)すまふかりかりておりまぜてよせつゝ
蔵(?)気にむかふ(?)心(?)家(?)にあらずして万(よろづ)物のさまにて

可笑記評判巻八

いろそで貧窮(ひんぐう)なるべきやうやまひし病ひさまは十失して
これあり第一によき医者をえらばぬ事第二薬は大
きみして飲(のみ)やう薬(やく)しやう全体へ逆し第三早く
療治(れうぢ)せず第四いんよくを制(せい)せず第五みだりに
つゝしまず第六物をいふ事あまりすぎ第七に飲食(のみくひ)
みをはじめ第八に霊(れい)仏神にまうでをする事第九に
神子(みこ)山ぶしのいふ事を信ずる事第十に薬代(やくだい)を
惜(をし)むすべてこれらの病人(びやうにん)薬代(やくだい)を惜(をし)みてこそ
欲(よく)ふかくてぬ医者(いしや)をもこの病人のつゝしみかゝり療治(れうぢ)にあふ
とかくずいぶんやまひくすりなくまことのはくすり
の調合(てうがう)をうかゝして本望(ほんもう)やまりてもとむ金銀
と命とは物くらべとくし分別せよといつまで怖(こは)き事いろ

かもはべきほとく痛み出るときもありきたりて
またさき痛み薬三服ほど用ひしが後もわるしもやみける
痛みもやまで二三ぶくてハいやでくわん僕もつてきたるにて
薬二三ぶく用て平愈もの也されバ下手とて別の医
にかくるほどの人も有るとくあしくなれバひとへに医者に
せいくらしてとくなるひの力念をいはずそのあはひにいろ医
者の薬はなしく用ひくらするものぐるしき平愈を
得る事代をもたしまず中りてならず此薬にていまだ
そして下僕もあるもぶく別のくすりにかゝるもよし
されバも相違もあまりて用のまをとりまてもわかちを
ものくもなりし平愈もらうほと云病ありけるやまひ薬は
接事ならすも人かくして終るまでしとさへいひてもこれ下

よの例へ小云ふにさあまで医者にも服とさらく犬猫に
やるまいのといふやうにせずとく如くさへなれで賢欲に
ゆづり飲食にもあまさらし薬不養性なるやうそ相ひ
無下殺してしまへみて終は死めづきみすてハものの無沙汰
非楽ともいつくりてい例の医者を殺ろ養性も人なす
まてどもおもはれ後悔の力もなく死にてまゝ死に
そならぬ也はしまぬ子細をやいかにや

評曰病家にもよしとよふは始めのやうもちあるなり
さる歯薬のふもしみつくく被病人を仕立てる事甚
むつかしいみなわが薬を盛儀のものにする也とや
さまよふ悔もしてかよふかいもまぬ杯もひつかるべし
あまりなる人ハやすしてはづかず薬あるくてきまぐるや

あさき醫師也とて不学文盲なるもの薬法をかくする
ありて膈噎痞塊などもみてとらず先薬をつかはす
その薬法のあてがひよくいかゞひつゝ加減もなく
どもあやまり薬毒ゆへに作病つきやくし不食痰喘搐搦
し同法なつめ死脈あらはれてよせかけて会えもしは
又ハ世の此の知やうとて無薬法よく人ハ眷盛扁
鵲なれバとてのぞやかたしよみゆそいはぞくさやすめし
病ハ市法りく元気虚すりそろよくあそびてさや
されバ扁鵲ぐもく越人よく死人を生返すといはずこれ
よのづからいきる生べきもの越人よく之を起して起
むるなりとしかりけるよむかずりとも此世に薬毒ありて
まちまちて病にふせるくハ何ならぬ皆つぎ只知のより

らるまりけて療治を手がけ也とあつうきるかくにも
病にかゝりてハ醫者とよのむ方角をえらび神子
陰陽師に占兆をとらすれバいがそこ手や癖として生来死
果ハつきるものぞよくふかくぞて積もきゝあふものを
まだらく金銀衣類をついやしさりさきくもしれず
外科りはじて療治よあとてあらく死去ほとのありの
あるひハ薬のあやまらしよりとりかるずいよく辞
おまきものゝ代ように心をくるてそのゝかゝりかけずで
人の死去るハ天命なれバとてものすむ病家の為無
然は醫者も此侍そなれひそて申かくいひかくは
ある人いかされし他へくにいたむ覺し
第八論にて辯する辭を略とする事

むかし神無月十日あまりのころ此花つくる輩（ぶし）御所よろこ
ことありし時菊（くさ）の盛ぐふかきを覗（のぞく）にとよ侍りて
簾（すだれ）をまくる人もなくうちしほれて燈（とうだい）
ゆきかひもみえざりおりしも小夜（さよ）風吹入ゆらくくる手
さしつきもまばらにかへる今宵（こよひ）の月に宮の家（きんげん）
の流（ながれ）新ら[illegible]て人ある人ハ唐（もろこし）の杜子美（やまと）のみ
集の中に一首ありきかはとほもの[illegible]ひめ[illegible]す
りにおふる梨園（りえん）の中に都ありて落葉（らくえう）風にちるがごとく
水辺（すいへん）にあるを[illegible]延陵（えんりう）の月をさして丹楼（えんしやうよ）とも
吟（ぎん）ずるのちかくこれを書きてそれの中に[illegible]
さしのぞけば年のわかき[illegible]流罪（りうざい）ありて男女（をとこをんな）ありそ
やせて鬚（ひげ）ふかくとなへ（え）[illegible]ありし年[illegible]

とは卿（つかさ）つゝしと清（きよみげ）みけりとは御感（ぎよかん）ありてはくえ
此事子のしまへわざくてしよみぬしたる書ともあ
多とろちしそれハそのやさしくいかなる人もせ人よろの返
昔漢の文帝（かんのぶんてい）龍馬（りうめ）なるをせしものありけり
昔もろこし漢（かん）の文帝（ぶんてい）の御世に一日に千里を走るとそ
ちしる（さらで）馬を奉る大臣（くぎやう）めでてさいはひ[illegible]
ゆわくりまさそ文帝（ぶんてい）のたまはく伊世平治を
行[illegible]子細にまうさく遊（ゆ）
山（さん）陵（あさき）まで行幸（ぎやうかう）は一日に五十里又合戦（かつせん）の時
もゆかで五十里にさだまりぬれどゆかざり[illegible]
てし[illegible]万乃人馬もつかれぞ我まづ以て忠功（ちうこう）とよろす
なりなる文時にかく[illegible]とぞ[illegible]

あまたの人馬あれハ稀ものまでいつく忠功をとげけれども
それぞれ一人の里をもくはへらにのりもするもちなの人
馬の里をうけども人ハうつくしく養ひしこそまつのもの絶
やしなふ故にかくし由来けりやうかれハなこれらなかうず
しぐぐやうの落てもなりから宮をわかるるも古語に

評曰 文帝魏の者とやしのふ陪つぐしいくのしく昆下に
まつ仮楽しもの帝にまこ理をとんで貞子呂ちく帝
代々にいうんとする倭奸怪鳥乃形行優よまい皃
出てし後漢乃光武皇帝もをとも千里乃馬と交
剣をふまてよりもの光武さらまもらひ給ハ
すとりやもとつく足のうらにわくすわりそても縁
しもの何ゆもまづハ用ひざ帝ちく退せ綱

みな後醍醐天皇乃此時もりるとよてよりまかせを
万里小路の中納言藤房のいさめにて天下乱れ乃
端おこりと中されもうして帝逆鱗乃ゆゑなれハなり
まの年ハ手記にあり由来尤さ地にてまちつよ
何ずれ乃纔万事ふまてこくぬれなせ
第十曲つて随周ある物乃第
ひとまろ人のうちハ下臈乃切ま曲らなのせずつてき
わとひまもまつく裏道の物まの鉄曲と心地ハ一曲
ゆゑりてこそ貴乃地をまた曲するふ随周ありま屏風
も曲さく打ちしまして見をふやくぢもわれでたまハ
無りやまよりせうちづ首世乃人の世中ハ針の
まがりやも物く気がみまがりあのまくあり

評曰誠なりて人は周なる物鉄曲子屏風からくり絵にて
気をつけて申すは鉄曲子ハ海ぐりて世の中は周を
しる人屏風ハ海ぐりなる周を並べ物を海ぐりてく
真に害あるすと心得て人の利ありて然るにハ誠なり
恭をあらふ蓮ありされて外行の人つかへもなき
日本道しく写をうけしく見やすく人の為にも
いとしかるこまは鉄曲子は誠まつ流まつく世の為
物は乏りかうよしにそなへ事の倒せて流行の
中に九郷を棘となる棘ハあまり刺のわりて中へ
求きく人わるかわりで行手をゆるして形写も
いかの刺もよく内へハ慈悲正直にして私欲なき
とくは此わらまよう乏くゆがしく也

次は當世の人の誠なりやうを計と家まみるも也事ーー
概をつくりずめの事はしく衣裳を縫の律周なり
家ハ事はしくて敵を亡ぼす徳あるをしる害する
横わりまま行人まりて正直のまくは事としてく
紅のよ慈悲のなり人かきハ邪なりとそもく人み
まるはらくしの過るまも
第十三蜂蜘蛛菌の事
むかしさる人は不所ハ世なりはひろく見るくに人く此家
能は物縁しそのうなれもうつをなして云に蜂と云虫ハ
豈此わつくしくま事なは節まそくりまわて此世は
中もそのよそく事のやうなかもの事のひのく春秋と云
まくらぬる時節としまする楼井を傾飲とするゆ

蛙ハ此をあやりおるにひろく奇麗の所ハわろかりきて
清らかり優して海川とふとほしきみ大荒とふたまさ
あえづるのくまたちかる所ハ濁りかく夕まらや餌をば
めあそんにはむえばへりおるにせまくまに奇麗あるとさへ
わらしと思ふべし

評曰此一段ハ二匹人々のせつなハ世まに遊蕩をやうび家の伝
そうぶしとやひろく見まくせあるものあまする
つまてこ去りあきハみもあぢひわじと思ひつめて
至極の事ハそぶりてもこれを聞てもまた耳
まもやらわずして行ちとかわり此書のやこまあり
二番ハ世の中ひろまわぞとぞわてさまさせ
わるべゝそれども訴がひぞうても叶そずの中ーとやまく

わかめんとするかれ濁とするてあるひもわず唯
色えて足かとせひく走るりのあり雨とゑての人
の世をこれ此功なほまれ安宗無事おして適あなく
莫あなくさつつ浩然の気ほ中あひ天まを独かれ
面白まをかしめほ人のゝ色赤宅鍛のじょ
清潔の竹房を飲拵抄此涼風を吟じ節を定まて
野せしいずこびつ天年を来らうゝはとほ去りさく
鯢ちて廻とうち次いてでくまも秋八ふ此大抵と志ゝ
りんやみ轄井の喧蛙こびつきのしを鼓吹鼓躍
して池の露とほいとら次ほとまを大屋こる堂て豚
とつての家屋をくんやきのまにそのしこはりてん
まき出へわろとく派きのしうてかほひのかうほと

世乃人いつまでもなからんとするは綱面のいのちをしらずし
てゆかしき事なるその天命をしらずいはんや先生はなるまじ
くわうず彭祖が七百歳蟠桃のみなる年をかぞへても何ぞ
これかのあさがほの一炊の夢五十年をしのびはべるか
又胡蝶の夢荘子とあそびてそこばくの千年をすぐし
されども此院のあるじ二万のかわりの中にはいかれぞとら
しせん後の評をきく而已

第十二 種のみなよきは人を悲む礫のす
むかしある人にはいかなる時か山林へかくれし給ふと
いひし畑のまなこにこもりて仰ぐ人をまつる代と
なりし君のうらみかりきは時の旅客も朝人皆此人々
谷もとみあわて立ちのぼりて鷺のかくれものゝはやはりい

こゝのいかゝやまの山の跡まで種をみてあそびを
かけりをひおとせるは此よりて潜竜のひかりし人
こひかの侍りやうなくいつとはなしに婿此ようしたるて
これぞあくまで思はかる此山にうつりすまでもみな山は
称されるはかのみくみ○こゝかけりをひかる事やし
こゝ今西こゝ方の部こそみすぐるこゝ守也ここまれぞふ
東山水山寺の山へうつりてしばらく住ませよみこそ○正
まづりわりまんすに今みゆる山とたれしす数で不絵
気ぞ都ときゝそまきにかくれしてよるせとよ候
こくえすてんのなにことをのまびめ氣に業也
こゝしてくへつかくそれもまちかりかはれて
述懐とまゐる此勝をすくる○この歌その末に

のさてこなふ人ありてらざしハ雨りをわりんてもみ
だりしくえも義にも笑ふべくしくたくたるに
まふべりかるかはそれさるふりしとのしもかでふも
え称するべしりたん人はをもせ
評曰一家ま忠をえそのをもそつを知るはよりいへ此
庭より忠節とあじ争ひ軍陣にひとりそとも
そ孫が一孫もるめをでも引まじき兵法をもつく
年をつくりかみにそみのやぎしそいふそず侍霊
を礼義ふりて和して家を抽んずまことひろの
まを臣は勝わくおもし或は又年をふる〇そそて
まふべりとも國じ姓はず心して是敗もせざる
てもこれハ天命なりとさぶれ此徳来するとむに勲をみ

打ちやがなち勤の人ぎしめいかるむ世みそれとかは
くりきてえ体をもちをすく成もとがめ次こせをを
そそち忠貞を実此人ともつをとれ害してハを体
をを角してハ我体をゑみ運の実はいとしくよび
めけ義もしきはりせてぎよりのをる尾のまふる世と
第一ふ忠のゆへ第二ふ義の義第三ふ礼のを
次可思痴かのむ中を勝わりきをやすく六分
世を中七知は三のを世をはふき秀の別り経過未練
うりがめしきく人わでいつへりともはずまとる
ぐごうもすもれ是非もせず葬の風をまきゑ
よくでよく可年根をへてみことものつ生もなく
年をとつき老て死をわざくて世の人々の命いつもそて知

とをさんより死こふがましといはれ かの侍のあれ
といふずすゝも(なく)あり人みな一(と)つくの空(くご)をまわり

第十三　伯楽(はくらく)馬を相すと云事

むかしもろこしの人に云ふには 哉世乃人の主君の世としてよ
き由乃ことがらいのおさいみと作せあるきりとひろき
世中にひとりとても(いふ)(と)も(い)は(ぬ)人ま(ま)に(孫)のひまなの
よろこびよろこび藻(も)に信(見)とかひしめ世されぞそのうし
り伯楽(はくらく)と申す賢人(けんじん)ありし人馬のことをよく見
しり給ふされぞ世のまで伯楽(はくらく)と申す人なりして
こそ根よき馬とうかゝるも世またあふれさはりて馬を
かゝる馬は世にもまれなれば(くだん)の人これぞ伯楽ならではなく
見しり給ふ人はまれなりせしかばなくぞ今の世のもの馬を(かう)

かくのごとくなるは賢人なれども(見)しる人なければいたづらに里へ
うもれもするゆへ(日)のめを(見)ずしてあたらしく一生(を)すごす
あらはれずしてやみぬ いはゞ根よき馬もうつろふは常
又大豆(まめ)一斛(こく)をくらふされど馬をよくしらずして常のごとく
やしなひの(そ)のやうにやせこけ(そ)のすがたもみぐるしく(やせ)
て大豆一斛(こく)を(くら)はしめずして馬の(心)に千里を(かけ)る(能)あれど
馬とうかゞふ(力)を(も)力もあらはれずして常の馬とかはる
ところもみえざりしかりてそのまゝにかくれたりされば
此(この)馬のたぐひは何(な)く(里)にかくれて(ひ)ともしらず(や)みなん
されば世の常にあるものゝよく(ゆ)くみちを(蔑)(さげす)まれ(さ)げすまるゝは
いふにおよばずしてもなを(人)(す)(や)(ま)ひするに(つ)(か)うるゝ(ゆ)へ
なげかはしき(なら)ひの(る)ぐりはまよひのなかにありとしるべし

さはりて乗(のり)やうかはりてもその事をうけまし駈(かけ)みゆるし
まつもすあしきもはや馬をとりてかへ見し人これなるを
細(さい)はらくみりやうさをさておそ見つき候ふうちまいれ
ものずの事とをも本物がつくるゝみごとにあらるを
うんでもをつく薬(やく)ぞいふもなしてハ雑(ざう)人をもつく
目利(めきき)しをなぢきう作楽(さくらく)のなる体ようもちりのなどを遊ぶ
すたく今日や金銀をもつ体もとへ小判余(まあて)しくとちせのか
書の事とらく唐馬の服(ふく)ナおまで銅(どう)のみと同じ半ばくけ(まきけ)をと
うも古宗(そう)故(ちやう)紙(し)をすいはらるゝとなく掛(かけ)させそのうと
なかはすたく悪人の見聞(けんもん)をりくくふてきまく
あつらひまいかなるなどく乗(のり)せむりと同じすかす
やきはでせるいはくほとこのまいれ見えかふてはいちそくを

みせることまで侍ともかう入これハ小僧(こぞう)人まてといはれまをめぐ
き給ありとも主意のゆるしようにて給ともかくしめすまうり
まして嗜(たしな)ひまいらせ下くまでそのうちひさやまなひ
たをうずらぶ話(はなし)またいふをうかびきれゆんとして國(こく)名を
ところ旦又ミをかきとよもしへき箪瓢(ぶりや)竜罵(ちりや)詩(けいさく)筆子ま
四宗(しかん)あるもとを好くつてこそのひみるまで記給ともかれめし
よかつらひのまくも金銀をおしもすくさん小判がれず
りちくは重宝あまの湯(ゆ)をえけて同学(とうそう)のみまゝら包を
あゝまぜうり切らせまさしりせちかとまつ候小方(きせん)を記(ゐん)
するやさあつ方便(てがて)を全くもかくすわまてで飯中みやらこ
もちうしをんで大切しもいひなつくでや飯中ひくちは紙(こころ)
きずちゆまりのかうそわで万事ものが候けりなめる

こゝろ中まで悪のりうてうらいはんや他国の人が何
とてさこしみちうにてぞ万事をさしみちうにまかせん
うかしてこの国にあるおそるゝつきぞやうしあるに其
似かやまりうたかひぞせうりけうき侍るをおそきつゝ守らんとし
只善人とぞよき人と見てのし目利が行てまで侍らう
せうすも世宝にてんけのおもりは其ときは親のせと
子さらにまず子のかたを殺しつ文世の中そいなし思ハれ
さらのうちれりして他人のか行にて是とふるべき
そとゆかりしめきうし牛をもとにそれはうつもりしき此を
狸とて是天の王を視とうけあしかまれハ精霊をなる
猫のやうなうたるきぶとのもの人気は迷物でうん満んがなり
らん餌とのがすもんとさ悪くいふくしのは目利ぞなされ

はぢまんはすつきてハけん人ぞ目鏡人なる此は目利がおう
きしくらんやさあまりぞ人のうしろ行しきさとひくかし
らあよはやし蛇まんハ悪行ろす蛇やかやらん
評曰わろき人ハいろくおろかし楚の項羽ハ力はよく
ちくく山はくづしあはめまきまかせはちひしきそく
宗はいかすぞ日天其居そのひくろは射しまで地
よみやいつりを打うして軍兵そまもしらぞここ云
馬ともれたちとみきそくかずとやまいかけき
ちおきは七十餘万騎の軍兵ありあがりしるきその
おりそしあるまそる親しまちしまきもしハこれなる
親のつくまよきさのかかうりしぞ也とは儒教
人のいなく張良陳平樊噲周勃韓信酈其食

あざむかざるのみといへども項羽にむかひては
こまやかなる事にかゝづらはずして項伯は生ぬる
血気の勇はまぬかれずとも仁義なき人にて軍法
[illegible]むと[illegible]心に祖は[illegible]仁義をもつて云
[illegible]世の武勇をつくして[illegible]
項羽の[illegible]もとより[illegible]云[illegible]
[illegible]不世出の[illegible]祖よく云[illegible]
よく云祖[illegible]かはり[illegible]高祖[illegible]江の軍に勝て
漢の世となり[illegible]
[illegible]
[illegible]賢人を[illegible]
[illegible]賢なる[illegible]

されど天下国家[illegible]人何[illegible]
[illegible]地[illegible]人[illegible]
[illegible]人の[illegible]金張は足
[illegible]
[illegible]賢人[illegible]足[illegible]
[illegible]
仁義[illegible]人[illegible]世[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]連城の璧[illegible]
[illegible]荊山[illegible]
合浦[illegible]世[illegible]

かくて行しを思ふべしこゝにおもふべしや
猪悟能の剛利ハ見て邪心の人をまどはしむ心ハ何や
あり也といふ事自然相違あり仙楽よくいふをきゝたり
て用るがごとく也それといへり又仙楽がいふ所をきゝて[illegible]
人ハ生まれ殺也とおもふ人として猪悟能が所にあるを
見のごとく人をよく見しるものに言葉なりこの人今
楽すなはちして猪悟能の剛利ハ猪悟能を見しるものに有てし
よくこれを見るものハ文嬰人いふとも心ありてしかるべき
行もよしとこそいふて剛利しのみなれべきにありて也
呂祖[illegible]義理あらはせ人見るも[illegible]の世主宝形あるに
まして嬰人云にかゝるべしこれを見るをおもひつゝ也
よく見るを見るべし馬黄いん勤能り道[illegible]なる嬰人

無欲なりといへども才智ありて佞奸なるものハ宝子の
ごとくにてあるべき也魚目ハ真珠に似て野暑の
黄精にも毒あり

第十四回人を見る三蔵の事

ゆへにかの人此きゝいとも此らにいふるに長年とあらんや
てハこゝにしれすのしくせんとくらひ明の気よそ傍す
中の事れ人をよいハ言すとあるやてハものうひ福ぶ
とさいうても心をせむかぐ私の無念をのべて何やまり
ありといふよりをかきを行やまりハ次第くるに方便ある
ゆへ天下の衆人とふかきを以て心にすみすとみゆるやうて
もとよりのすゝみと見る此妄想まよ人云をこゝにといひ
よく心をよく心をしるへ識得してちそてハ見ゆへす人や

かりそめの事に名誉をうしなひ、ひがみて○つりやうて
悔ともかへらぬ事也

評曰、人ハ此ことはにて天下をかへてハいかなる事も
云はゞ云べし、かくべき事も書べし。但時に善を
ら中■に下りりをきて何事もしらぬべしきれ
ぞよろしきに人ハくつりにえりて、そのめでたき善をして
非義ありしく、此書を今此書にいふところの人ハこれ中比善き
人よりはなりて中比よき人ハ下にあるせし此書さうつ
りの義をさしおしやうなく動じさせらくし。
栄花のありしそ、意地もさうらハ、此悪人あり、此書悪
を見るハ恥なる事、人とをしてあらそのきハ悪を
とげずくばハ善をもとくめがしうつるをかくらば

こゝに中比善き人あり、此書にいふ悪人ハ下に此悪
あり。仏神をうやまひ、親に孝をつくし、邪欲の
さかりに和歌をまなび、棒倒をもてあそびて、つゐに新き
悪事のなる悪人ハかくて当年月をつくしつゝ
第十四仏家ときこえて見るとしく中
むかし中秋の比よるに下善ところあまへてやまの山
山の上にのぼりて年寄とつとめし小舟吉の細き煙
らくにそのつきの墓にわたりて侍りしかば居の山
あらしくれ九折なる嶺の松風をこゑてきくや
桜にまで帰るとき庭のはな此雨さらさらとし
てやりたる事も、そのよもわすれし此さそや
さかゆる霊亀山とうたひて額ありしぶんにの云なり

此歌のまへにさいさんを何心してさまへにさいさんとらへるゝる
どぞりく紛浄し乎佛家にまいりかれどゑの絵比ゆゑ
小面世中に年をおしみくつゞりをなまそて衛よ
浄ち日蓮の向宗のまえ　御身してらふ北をなゝぐ
まくれりてゆく此佛だんをくゐくゐくしく思
ひかてくらぬ

評曰此段つまへ草ふ無類ぢゃまし栗栖野とらふ入て
世体のぐるまへ浄人のそみくも見てく内は感を得へまろ
日柯まのゆゑくすゞもゆかゞりまじしく垣ゆひの
りまゆとろてあづのいさぞと思ひをとろして
ゆりるるまりと思ひ人会ゆく書よりとゆかり武列
下学比異亀山南とらん強と南き阿弥陀若して思れ

おかりくに若むし松風そらくひゞきそて浮世人のつまを
さめし魚の山音をつゞりまぞかろく閑伽のえ之人
とそくさくらある人よ行ずそつそでり使べきそろ
まさ書比能名佛家とらもく思は大南しまゆす
くゐぐくし此人は何ら宗娘人とらし佛家比在蔵は
住持のくらしみよりむやゆゆ人連歌のおまま
あるにまりすゆ力こそゆくすま猿
とらはう
搾るあき野寺は草の案はつきそて
こ寺後づり南とし世体のひ俗をそわらく乃縁
を跡下ちふん人かにとつくあくしるくにちくある
らん人あるにまりゆく日はとらり良の比風体

彩(さいしき)といへど金(こん)にかざりしを此家にかざりたまひけんハさも
あらばあれとこそ紅檀(こうだん)とてきそもとの牛にもちせ(ざうや)のその
名の優闐(うでん)大王ハ赤栴檀(しやくせんだん)乃釈迦をつくり月蓋(ぐわつかい)長者(ちやうじや)
ハ閻浮檀金(えんぶだごん)乃仏像(ぶつざう)をつくらせ祇園(ぎをん)精舎(しやうじや)ハ須達(しゆだつ)
長者がこんりうせし不思議の仏閣(かく)なり　みかど
も金(こん)をちりばめ雞雀寺(けいじやくじ)ハ阿育(あいく)大王のこんりうを
しかも荘(さう)ゑ(絵)つくしくつくり　釈尊(しやくそん)ハ三界(さんがい)乃慈父(じふ)みこ
乃きみとして讃歎(さんだん)し優婆塞(うばそく)ハ證果(せうくわ)の羅漢(らかん)その
寺塔綺麗(きれい)をこのみしかバあらず仏法ぞすゝむるにや　さ
また後漢(ごかん)乃明帝(めいてい)ハ寺(じ)をたてしより紅殿(ぶつでん)乃
くはしく寺の綺麗(きれい)なるにをこりたり目出たけれハしてそてハ
聖徳(しやうとく)太子日本にて寺をたてしより初めて堂(だう)円頓(えんと)

乃七大寺・東大・山門・寺門・南都よりはじめてかざり
ありしかバちりばめ金銀(こんごん)をもつてあらため仏具(ぶつぐ)荘厳(しやうごん)
なにともおそでおもひハ七宝(しつぱう)をちりばめひハ錦(きんしう)をかけ
かざりを尽(つく)し寺綺麗(きれい)をつくしてほとけ
にまつらずてまつりのかざりなるハいはずも
さいはひなりける　儒(じゆ)にハまた宗廟(そうびやう)実鼎(ほうてい)乃都(みやこ)よりはじめて
宗廟(そうべう)社稷(しやしよく)乃宮物(くうもつ)祭祀(さいれい)乃装束(しやうぞく)金銀珠玉(しゆぎよく)を
ちりばむ天地(てんち)神祇(じんぎ)のみな茫然(ばうぜん)なるまでやしろのかざり
みな寺綺麗(きれい)をつくしてまつれとも○とすべてのまつれ
かのまつりをもつてつゝしみしまつりのかぎりを
いはんや仏法の中に仏具(ぶつぐ)荘厳(しやうごん)堂塔(だうたう)以下みな人
よりこのみたまはんにおいてとかく申すも

ゆへ達磨無功徳といへりかやうのことハこれらハ実禅の理
を悔ふまゝをもしへんなる也宋の虞愿が明帝を
いさめしハけふの國銭の力をもつて寺の費をなせしなり
今の世にも俗にして仏菩薩の寺奇麗なる体を好みやり
その住持の人のみだりに浮世の栄耀をつくすなりその
仏家を荒廃の伏家とかたり仏ハ濫に悔されすぐれなき
あくハいひ仏ハ寺をもつてむさほる也浄土の宗へ一向宗をさかん
まことに禅宗の人の説(?)目(?)ありてなびたまき禅宗の天
台宗の善悪宗の名もすこし何ほどもおもひ仏家の
奇麗なる所へおもむき宝をつくしてひさ尊の纏縛(?)を行ひしが
まことに是非とも方人ありて空(?)見(?)なか
ありてもなき事也

第十六　横目(よこめ)云乃事

昔ある人の云るハ近代を見るに何れの家にも横目
ありて人の行跡を一ツ一つきゝあらためすとかくしも
盛なる此横目乃所いかりと思ふハ昔の入道清盛
もとこそあらりそのまゝや此の人の横目をもつて十あ
六十余人の禿(かぶろ)を作りて京中の洛中洛外を徘徊して人
家人説をいはせ園師の是非をきくしたふ者乃善悪を糺
をさまに悪口申す清盛へ云つけて中の彼等もなく死罪流罪
にせし手にあり天性に此入道悪逆無道乃人なればなり
此ごとくの近代よりハ甲斐信玄なりしも横目を以てはりし
甲斐乃まつ是非書をかくされそれをもつハ家中の
ある人の善悪を知るもあつまると功(?)あり

半古の吟味つかまつりて吟味ありて捌訴人の越度をえらび
と国の目安と裏判なきの役人の依怙ひいきある事を
捌かずしてかなる人の中にも、ちかく有る者は善人へは諂
曲贔屓に請とられて悪人は追従切横あらばかへつて中納
言中ありさうに道理よりかへ半古なる吟味も深く
決よりけしからぬの中にて道の有りさてはよらん天地
名分の事なりけるにや横目を作りなさんとかくるとも
ちに座めして菜吟味浅く無欲の人をえらびて七横
目はかくす此地はすしゆへし
評曰横目の中に相国の時三百人の走をもちいて
批名の飛よりかけ見ハ天下国政のしまりは
らずわざ秘事を人手とりかへさせりと見えけりとぞ。

次の今此横目と云ハ先を先例とするものハ行ず埋
金の執権時宗のころきも鶴岡坐の人を修め置の
信ありて諸国まつりし古の忠邪欲押領なる
此事を正しくせんとて天下国政有民のために横目
とめづらしくこれより具に第七のまつりごとにぞ
横目此みやびやかに云ふ次に甲斐の横目ハ一国つ乱
の中にて天下有民のなかにす今は諸悪大
名ぞくうず家中国民のなかに横目ありて天下諸民此
よかに横目をつかるて人ハ第一に仁義をすて正直有
らる無欲の第やすまち忍文をすて円満の那こまう
の名願ての事に仮ものへ任ばへりとしずや
第十七聴訟の事とてせし中

ゆへにその時さる詩を作る人まいりて章の下にて某（それがし）
に對（たい）せしとて揚出せり落句（らくく）にいはく

峯（みね）如（ごとし）花笠（はながさ）衣（きぬ）に　面白（おもしろし）對（たい）春山（しゆんざん）に
岩（いはほ）似（にたり）苔莚（こけむしろ）布（しく）に　眼（まなこ）青（あをし）開（ひらく）壁間（へきかん）を

とよみけれバ[illegible]智（ち）の初（はじめ）か

第十八　周成（じやうせい）桐葉（とうえふ）の事

[illegible]
[illegible]
[illegible]
智恵（ちゑ）の火（ひ）もえて[illegible]
[illegible]

評（ひやう）曰（いはく）識（しき）人[illegible]全（ぜん）此（この）ゆへ也

よし智者の愚の繫辭（けいじ）に周成（じやうせい）桐葉（とうえふ）を[illegible]
[illegible]
[illegible]一段の經（けい）句（く）[illegible]識（しき）の
[illegible]智恵（ちゑ）の[illegible]
[illegible]識（しき）を[illegible]正理（り）の智恵（ちゑ）[illegible]
[illegible]識（しき）[illegible]
[illegible]悪（あく）[illegible]
人の[illegible]軽（かろ）き[illegible]智恵の[illegible]
や識（しき）の[illegible]識（しき）より[illegible]
智（ち）より[illegible]識（しき）[illegible]
智（ち）より[illegible]識（しき）は[illegible]智（ち）の[illegible]智恵（ちゑ）
よき識（しき）は[illegible]智恵（ちゑ）此[illegible]

くるしうしゆゑに情より慈悲の端なり情より慈悲を
生ずといふ所なりくるしうして御せず惻隠怵惕は
仁の端なりといふもみなわかれて地をわかれて隠とある
といふもみなりと慈悲よりおこれりと知るべし

第十九　水に四見三味の不同ある事

ひとつさる人此みつの所ハ四見ありて云く天人ハ水を
瑠璃と見給ひ魚ハ水を家と見給ひ餓鬼ハ水を火と
見給ふ人ハ水を見るなり三味とハ見るなりと三味とハいふ
て牛ハ水を飲で乳となし蛇ハ水をのんで毒となし
人ハ水をのんで水となすこれぞ元来ニ元一味なるを
まちまちにわかつ相によつて分く千差万別となるこれはいろん
や儒者の道でもみなおなじく思ひて邪正にまどふなり

評曰これまでハその解純陰にしてその用ハ純陽なり
といふハ両義雲雷と知りて上にときを海河泉弁
とおりわかりいハ流通わかりいハなぞなりみハかやかも
みいかにわかりこれみな気の不すなり不也わかりいき
甘く或ハ淡しくみえてゆくみハ苦さいこまるみな
味のうすなり静るなりハ動とも南とよくも
いまさらくみずにハ去ほどこしらえほへくざくもつしえ
性ハ万物の源としてよく万物をうるほしそだつされ
だつ経のなかにしく四見三味の不同わかり中ハ言
そのまゝく此果報によりなみ此性解からハにきうるも
そうくハ寒気に堅まく雪となり霰となり雹と成
又ハ溶で水となれどこれ此性の鰐に於る

ざんげし
彼等儒佛二道の書籍もさほど人此くらべなく正理
此見と邪理の見とは不同なるぞ されバ書籍の
義理とさへ申ハ月のかわりめごとに三日月ハ
三日月なりのかわり八日ハ又八日の月なりのかわり十五
日ハ満月なれど此ひるまかわりその書籍もさほど人の
智恵なれバ此義理ハさゆうとかわりまさ師によつて
傳受もせし自見を義理とせずかならず拙されバ
中々すなはちひがみとなりまんまんと海なる
義理をとりて邪をまよはす事にはのこさずなりとて
海となし一毛を山とてみずといふ事 鍼菜灸究の名
らんや書籍の義理も又なくなり佛ちうのやまみてハ

煩悩と増長し儒者なりやそうりてハ政道の害なるべし
よくつゝしみ給ふべし
身共祈るにもおよバずいつはりハ俗人済さる所の中
もつとも人此ハ神といのりに髪をのばし身を清め
精進して殺生をせず服をとず酒をのまず数度ちら
難儀をうかゝひせめてハ百日なりともつゞけ不乱まさ能心をまと
いのりをもせし俗人さへかくのごとくおそろしく利生のさんなき
むやまるもかなれそれもきかりのを利生のなきをと
めで俗人のなをさなぞなるとすれども能も他に念仏を
よひゆきぬるもついないともいのるぞ嘆かはす悪業
情ふかくなりて悪業かさなりたまきいその不足なる此故
也あるは何ぞ述懐をつきやまひ述懐せぬかた

王命(おほせ)にそむくべしともしくいのりやらざ利生
なくして却て罰あたるべきものとはいかなる
読人といのる人罰あたるはいかなく利生ならく人は世にまた
くなし

評曰此人此書籍双紙物語りは神経にいのりやます
事猶のあり〳〵にて無下して却此にいはしく〳〵験の微な
ることなく新のさかいあしく〳〵に利生もなしつくば
たしつくとより今此世にいのりやすきに此るなるつ
いかなく罰のあたるりのさわまでも利生もなくなき
なる徒やみにもむかしは人のうもなく居なしてなつかしつりやがい
さる学徳あく信心厚くりより心世人今乃世の人は
うき世通りく是つりな願がとて事ともかく信心深く

そこひかなきふか垢離(くり)をとりさらにちかひあしくとも
さらに思ふるべきやりもなくらきつりあらわつ心人
は神明(しんめい)の御(おん)冥慮(みやうりよ)りなあのくて利生(りやう)なしと悔さ
ねがひも〳〵振(ふる)ふはいさし新しむりを〳〵そのならそ
はをよがり拝(をが)むとも〳〵すいけのもしに冥加(みやうが)はうつさ罰(ばつ)をうくる
あるとわれて神慮(しんりよ)に験(しるし)をうくる御中し験ものはなくりて
むかしいにしへ新ものがりてさつり出(いだ)して事人にも新をも
出(いだ)ししてうつはこを行(ぎやう)者の信心(しんじん)をよりて神(しん)たん
いつわりにもそうまなをかり神乃心は験のごとしとつくすと
こゝしめんべくなかせ

鎌倉一腹…義助(よしすけ)…脇屋(わきや)…識墨見(いえ)の中

むかしさる人のいはく色好(ずく)ミ年比の新田(につた)左中将義貞(よしさだ)

ると鐘会は相模守と中不和なりて鐘会より軍
をおこし新田をせめしかどもとかくしかれで新田乃御一門
あつまりのぞく軍評定ありて或ハ沼田を破りして
利根川を前にあてて或ハ越後乃軍勢を津浦へくら
まえず人田中は猪俣なりしが墨兼にあづかりて義
自分乃内会津ハ照虎沼命兼助をもつて四方へ兼して御
出陣を催促しも給ハ死をのぞんでけれバ申すもさるべきと
ありし義とせりされバ此越軍勢をすぐれて此城郷
日ころより知も運命つきけれバその用意ありけるなし。
又越後乃一族を打ちかかりとも人此不和乃世なれバ四方
ありしをもつそ指かかりありき見よ其の中にゆるぎ
うしにも破りしよくて新田乃身をゆだねしかどもかくして人

けよからんも口惜りけも速死せん命ながら縁者と脇
なりて鐘会を他として打ちにせんハ不縁の面目も
請むりそりはりしや義理をさそいとして討ちそろふべきと
宗をのがれて当家の一門となりしと感同して新
田をも高せ人ハ随分に味方をせいりてよき
大軍と攻る鐘会ほせめかけりばしも運ひくも世すれ
使もしに照虎も助乃のこさいをも不侍まるひくちん
じ見抛まづ生きしと言に書つけおくるくハ左平記
にかかりし論もへし

　今年廿二ちゃうて此会戦よりハ寄城絵図をまま年
背きりし人此のうハ左年ののちんへ中ハ粮をたとて兵庫
もつむる策あるも申して寄城中のうち別れ人の寸

評曰古より城をせめて運と云ふ事の例
こゝをもつてひそか紀の中にも城をせめて運とひ
らきしかば楠正成がこもりける千葉屋の城をかこみ
しに運をひらきたれどもまた安宅波羅せめおとされ
て敵方の寄手は勢山をもちゐずしてやみ城にこもりぬ
またわづかの勢は寄手の大勢を見てそのまゝ氣を
のばしてくさ妻子女などはおそれ候ゆゑに其年の
くちをれてまた勝を得ずわかひは勝負と
軍勢どもの矢ぶすまをとつてかくかちたづかひは又
こゝにおいて敵の内通して寄手を引入たりしかば城
中よりもはや兵粮つきはてたるに割されて
どもは私に故障なくかつかずをあつめ終に落城

またもけふは落ざれども味方の後詰とぞ此敵
の寄手を打ちらし敵城をとらんがために味方の軍
勢をもつて後をまもらし敵ひろくも城をまもりて此
ところ少し落城せんとそのときに絶てその城をとせ
せられ候て行のみは一城に大勢をよせて雑兵あるひは
又別城をとりまく事にして敵の人数をまかせ寄手を
少勢にして後ち見ぜんかたく敵方の後詰は
の方便とてまた智略討果すなどにより候て此ほかにも
はかるべし速に敵をうちとりまして籠城せん事は分別
くらずはひとへ人数ありて要害嶮岨の地形と考
一統をまことにもつてきれ候はば取れ
のがれしもまぜし武田信玄の此ひと代のあり

甲州一國に城郭乃事とりそのころ依用あらざりし故にず
也されバ城乃堅固さる事に普請つとめりて城構をなく
ほかハ一とたびハ甲府斗也しハ信玄公のいまだ國
ありし籠城して運をひらき一旦帝也但し主
を討て家侍が後詰を飛て敵を討ことハ何れども
よき地形に大きなる要害をうちへて籠る也國のち
からの平地のころせんして事はせぬ人数のちあ
その合戦あしむれども必らハ籠城をまりて妻子を
先て矢間をそばつくかけてせきんこれきるハ
其の秘蔵し情をもはなをきそふ軍法をはぢて
筆席をせんさく吟味ある故なる久此城善積と思ふも
みな城より遠よりてそれる國がらひまつかつも堅

図に城をかまへ敵とりまくならば我もおのづから後詰
をたのみとそのたすけを頼むゆゑ也されバ城をよく
まもる事後詰も城中よりも城とともに手を渡られ後
詰を仕損じ敵に討へをとられ事の出来しる
利なき也とのたまひしとぞ

男女三歳の乳母述懐の事 並 事

むかしさる人のいひけるは人斗此ものゝ子女の出来ぬ
事ハ
はゝきゝ根ぬ親子の間の時にしらぬ人もあれ
ありし[illegible]他人のうちとてもかならずきらなんり
男女に[illegible]是非人ハ或獣に同じ事
物しらぬ人は其弱輪よのぞみハ言語わざやうにも

雉子さまでもなき獣なれどもぬるまじく又揉しよりハその仍
人をなやましにくくありとてさまでも畜類とも見えねば又
山ぢるしのなるハ鳥しくて利欲をわすれてもなき獣とのみぞ道
猿ハ藍甑とむすびでも畜類とまあくわすれ又もちくひ虫類
のちかひハ鳴都ぎにてわりくわずとも虫類とされ
ず禿孔雀もとより毛を銅めて見ずまでもなき獣と
まあくわすれとも人のとほもなくむまにて不孝
狼藉来ぞ見ずまゝろくしかふ半をわざやしれ藍鐵を
て利欲をえんものとそれ悪逆あれ此愚痴ありてある獣
生のまじひと同畜のかくともひとのの為ハ獲しそうな
人ありとももんとのものでもなるの人のまる同ぐるなる地獄
乃中なる後やしうづくしぬるうち

評曰此段ハ記聞の疑なりとぞきこえてありとまゆ
仁宗皇帝勧学のみはれんぞれんくもしなき
身のハ世の中にて文をもてなくばよろしとまことに
とんとすれて鳳凰とてめでたきを鳥の楼の
あるにつぐまづいを為ず聖賢にもあらざれとものまず
竹実よりあらざれバくらハず此ゐる所もりられハ天下
平らかなりと也又麒麟のものなりとされて麒麟と
てまことに獣なり額に一角ありて角の端に肉
ありて仁の徳をあらはしおもむきみちさだめて
よらず此ハ天よとかりよひてばまづ虫などもふまず
生まづ生虫をふまずまでちよちる青草をとし
とあとまずひ獣ハりされて病るをよ聖人世に出るとあり

まにさくんこすれば大椿とそ八千年を春とし
八千年を秋として長生めでたしと思ふ事なれど
てんとすまつば瑞光とそ瑞草まりありとてきき菌
のごとく又六指は有り和ぎさは珊瑚のまのごとく白き八
鱗は勝のごとく思さは漆のごとくきさきは翡翠色の羽
のごとく黄明のは黄金のごとく又紫色のあり神の変化あれ
名付がやうにゆかね遠と成りさぬりて王にえあり
仏殿まにくじき和をも仏時に六芝生じてめでたき瑞
をあらはすなり又もなきよんとすれば其の徳甚めでたし
こまれ壊ぬ泉をあ一切万物みなまよりてもみとし
歩みこそは生涯さればさまり虫のごとくきまものは三世
のなるは妙なるくんすなるしさかさかかつりをさまくんハ

きぐのつてのをにとよき懺悔して利なりにきて邪
欲あるべく思ふなんハ羊はしては鹿の皮をきし猿子
して冠をのべてさて仏のごとくあらん
次に地ごくの牛馬となりて牛となりぬるへし仏前に六
名を出ろうときに牛馬ハ畜生なるも知り地ごくの牛
馬なりぬ牛と讒ぬ牛頭馬頭となふ
又は地獄の罪人のなるとくるなるかすや牛に成て鬼ハ
獄卒にてく罪人をなふ人をもは獄中に新たなるをまちにけ
書は詞をひらりとくるをはすまれば地ごくに堕ろぞ
なるぞと書とき物とや
年廿五学文す根の遠からず
しきる人ののりほハ今時のへく学文もぬるたる

益とハかぎらず朝夕となくくすりを用ひざれバなかずかずの
すくなきところ内に業のごとく十日廿日あるひハ一月二月廿
日して退屈(たいくつ)して捨(すて)おく又一年二年もそのまゝ何ともせず
学文する人ありとてもとも或ハ病気(びやうき)となり又ハ塵(ちり)のやうなる
あり又ハ気(き)ちがひのやうになりて日比学する事もならぬ
すれ剽悍之人出るもの内にこまかなる命をおとしたる事もあり
此ゆゑ妙なる気(き)と根の人也とも日夜綱意とやうこそずん
ぞ根気(えき)のおとろへぬ癇ぞ七根気(えき)つかれおバ退屈(たいくつ)も打棄ぬるも
ゆゑしらぬ足しよる事しもみなおほすまじめ也さある
らず学文の正理(り)をよりさしおひかん悔むも又ひとつ病気
となりゆくもとあり気もみずまつくほとんどのもきあと
ゆゑるへいのちをさしあふ事しあゝ窮屈(きうくつ)ありされバ学文なん

まいるのりくとをしぬものなくたくしせてのことくしぞ
きめききめる毎そり此見ハそれの見まだくれて学文
成就(じやうじゆ)ありけれども一日ニつゝまづ覚え又まぎれもいで一年中に日
ハ三百六十の文字は覚えてかくする事はしおちれ
その三百六十の文字を一日二日まおそひゆかれんすれ
やすけまでもまやうまぎに根気(えき)をつくして覚えんぞ
高君山ゆかりしるやうあれどもまつにしくハ学寺
まうわてこゝせんがしそうして見て医國に建(えん)立とある山
なりきの山のハめうく大薬草(やくさう)葉まず出生せぬなりその
山のそびえたる岩よりおつる滴水(しづく)はみなみな其の薬の
ますそ代々あひありとてそれで此岩のしたある岩
有そりてこゝ思ずまたくはみて岩穂のたしみ

ろく〳〵と切めくらして薬焼をすへし山薬といふハ第一の毒也
また何とよく彼徳用あり日本ふる〳〵建山とよくかの薬焼され
せしといふ人もありといへどもかれ是おほかる者のつれつまま
乃さらにまた人参とも人参もかくわかるにもちいすハせんぐと
年功をみの彼われ也ゆへ此よく堂々の体をえても急にて根
気とうくさ便沙汰ふく漸くとらくとて七さるおしくて退屈も
せんに病気ともわけるかしらをみたちさひろもおかず必なほ
わろうきよし衆しきあくて初心とおもん人すなはちうたがひひろ
うろんやる井幹をみよ綆縄おくおうても漸くと磨
瓶綆縄の入りいつて穴ありさも漸くと年功を絶てぬ
がたきらんぞ建山の上とてすら堅ありともおもひ鍵ふそてもき
鍬てふずみはいたく縄も井きたさとひく結うてもおちず

おほくハ日々漸々と年功を積ける故也けれハ賢人の
詞にもまことせんぐとはのりてなる漸とあり学せんぐ
日を重ねて智恵をわけるとまし〳〵くるへきする也
評曰学文の体はよむのミにして日夜経学の事をこそ手ずから
退屈し病ともなりならんで年毎におなりて人の根
機つよくかく性のおよび抱らずしてハかへつて身の
あらたしく人ハ日夜頭書をかうる寸年とあさて学文
せしとはあらし勝ろし国の斉雄といふ人ハ中年
より本乃野人となりしものが田体つくりてわまりよし
ミそのみよく何中の御令何をして世体をまもるを
よりとすべき田畠体耕作すれども芸を知るをもの
うとしいつかして其体もつくもまへんせとおけらされて

みづから此いつく学問をせよと三千年をとをりすぎずは
あるべうきの茶をのみ信実のかたり紹約とその
て安楽ならむとするを寧静かうろくもれすと年
のあはほどもなくなし性子といふ事ありひとへに
体むる横ゆゑひとへに人ハ外にしく横き外すしそ
此ふきうて書傍をよみすすむ年かけて学者の胸
まれなり周威王の師とあり此下此説きとめ
すもとふとあり又董仲舒といふ人ハ春秋を学す
とて三夜をもて夜三年の間窓を見ず百年をと
もてはとめ学びてその三月ひろめしとせこれ
らか世を希なりとあしとすきまどもんほくとさきと
よきはむらしてふぐん学文はきしべからずや

いづ好むものハ長夜をとほし○されども退屈ハゆるうすべし
みだりに精をつくして病を生ずるハよろしからず此道
ありといへりさりながら謝肇淛が五雑組といふ書
にも長夜を学をとほすも子の刻をかぎりとせよ子の
時すぎれば血気もそこねて病のもとひとなりてまさるこの時
人は左右がしれず吐血などするもありとそれ
慨もすべからず富貴の人などハ毎夜のともしびに
子の刻とさしまでも吐血のうれへハなく勤むれば
酒食を飲食して病を生ずることとやしなう
清からず気をうしなひ気ものさかんなる業理ぞもあるべ
すとも文道素もりで脾胃を損ずるまま中気虚
となりてそのつかれの脾腎の乾え不足しん血のかきて虚ま

者もしるゝ也こゝまでも末代下根の者也み狂乱を
御中ハ生まるゝ文とも自慢をかゝりまず世の禍に
慢心して天狗につきまとはれてことしのかや
けくハなくじ此まゝを人ハそうじ狂気れつにそうと
知るまいでことのく人がめて細早速て肝火熾に
なりく炎をつきまて胸くりりえいつりされなりして
人をくれ胸いまく痰を生じて人包絡をふさぐな
りしに気みゐれとどくまく気らぐのに成也
何に建盞と井幹のまく人成めつく衛くにいこ文に
角しと云中し此書此之のまゝに朱文むり勧学の文
と引て字句ともしめさず文章とゝ今此陀とく桐遠
なり此狂気ハいづれの者をうしとゆめのへいへ人

第廿六 曾晳死して後くゆるの弁
むかしもろこしに曾晳と云人痛にかゝりて死す
ことありしあるかあつ家にてその曾晳子をつての会
これぞ今生にて常にたのしみし神将来るといへり
よりそのことへゆるしかるさやとみへをとりなる人
なりのまゝにうつりとひとわらも別にうつる事も
此さいまし人此曾晳まかりやくよ業成をけて見ざりや
となりひ退出てまかつるにけ力ハ曾晳まかりていひきこえ
ふことゝへる曾晳そてはとへり梅けりハいつてみて
ひろうの何とも痛にあまりて死するつめしらしとふ
こゝろくまのつゝも作のまくとゝりそめて向ていつて
さて今生と死して後の世ハいづれ嫁かりやあり答て曰

いや別なるものを以て死しては鬼となるものにあらで候
ふし天地のさかひをはなれて今見るにもさらに代
只生たる人目前にハさまで世不知死せば虚なり
てまつハ実なりといふべくやせぬ
評曰儒者ハ三世なしといへども鬼神の事字属也
もろもろを礼したるもさまざま怪力乱神とれ
ずとハ云ども儒者の生前をさしてハ佛家の三
世因果の理をとく事肯同此文の儀像をいふなるべし
ごとし論語一向に怪力乱神の事あまく記せり
されどこれ寓言なりや此論の事ハ異国古昔の
人のせんさくなくして像衆ゆゑにあらはれ奥にいへる事
あらし隋の李士謙といふ人ハ一人の客ありて

いはく佛家にいふところの三世因果のことハり有とし
からずといふ事ハ李士謙いはく積善の餘慶積
悪の餘殃といふハ善と悪とのむくひのすゑにはかず
や佛經にいふ道に輪廻すといふハこれ賈誼がいふ所
ところの千変萬化ハいまだはじめあらずして極りある
からず鯀が黄熊となり杜宇がほととぎすとなり麋
公が龍となり牛哀が虎となり羌子が鶴となり
小人が猿となり黄母が元亀となり宣武が鼈となり
又鄧艾が牛となり徐伯が魚となりしこれ佛家に
変じて異形となるといふ事にあらずやと客やそて
疑ていふくれや柳の指てみち変じて摽擽の
ものの所んやところといふこれ輪の類

せぢはの縁なりけらし乃變化も此年ハみな人のな
すところ也まゝ情なしいかでか變化をづさと云り
されバ宮さまかふのいかゞと小史といふ書にはせ
此四谷なるいまだ捨るにさに除にていずれ腐草の
螢となり竹根乃蟬となり麦乃蝶となり稲乃
蟲となるなみな氣也なす事といへども佛家狂中に
乃儀說をとく。それによりて人死して塚にとゞむ
土中にその災ありやなや魂ハ業有乃生果にゆきて
魄ハなほしばしまりとゞまず灌頂經の中にときたまへり
又三魂七魄乃說十識流轉乃說地藏十王經にあり
とわりよく人の地がたりも
蘘記が年倒をなつくといふもみなうつくしに鄭交と

いふ人なづらに鬼んと申ひ陳蔡諸ともふかしと
をかし母乃のわかりに塚ありしに竹二本生ずる
ほりて鄭交ちからち待を作りて家上毎年此
竹風吹て常に鳥聲をまとしと。其村塚の中より必を
いづして之を不侍ていりく。下に而年の人ありし墓に
眠て曉をしらずと云はおもせよりつの家に此
塚といふ井をなしずみ其のみ河といふ人あり
能者にめて坤ります乃が人里をはなれ野中にして日暮
くりまするわかに墓むしの中に灯火のすこしにみゆ
河といふ立よりて宿はかるともなれどおりし只一人にて
ありてこなたへ入てせのへとそてゆまいひいつまでもすぐ
周易乃あるさむ文を抽ぎりしかれども河といふ日ごろ

一　不審(ちゃうしん)乃事ともみなおもひわくる人ありて是れ
古人の証ハ何にて古冢(こちゃう)なりくはしく孔安国(こうあんこく)の塚(つか)
なりとさしやてあり河南県(くわなんけん)に浅理(せんり)をゆるり
といへりみな大和(やまと)朝鮮(ちゃうせん)河内の国二女塚(ふたつづか)の事河曲
てきこみかうづのことまでちらし(とうぢ)ぬ奥(りやう)わる事しをとらせり
今のひとく蔵顕(ざうけん)が奥(りやう)ありてありとおぼしき事かつき
みしもなりぬらし。鬼(き)神ハ新(しん)邪(じや)をのぞくの兵(ひやう)本(し)弟(てい)乃統(とう)
ん的ぐるしき事その事をくる事功(ぐぐわう)ところに将(しやう)得(とく)をせ
とさる人のやされ
　　第廿七運ハ天つよりりと云す
むかしさうり時愚(ぐ)親(しん)乃おもはさればハ運(うん)ハ儀(ぎ)式にそのあらず
て伯も戦(せん)場(ぢやう)は卯(う)きそてハうち死(し)をとげけいはは劉(りう)邦(はう)にせ

をすおつら義とらふ拙(せつ)なりされど天命まづくし
て運(うん)つよし運(うん)つよけれバこそつよがくわが力命を持てさて
あらておもしきにてぶんぐつきんや死(し)あつづきさ事ハ当りのさう
ぬ事也されぞ古人(こじん)もそもそもかやらうするに
正あらり蛇(やく)病(びやう)をとはれぞ善にそむくされど天命に
もそむくまでにハ(うん)運(うん)をもつて運(うん)つよきをなす
ミにおもひあらそハ大死(たいし)をとすりまつ古(こ)徳(と)にいつくちり
ずれてもおもりしるべからぞとあるをや山なる運ハ天に
あり人あるにいかずとおもつてきりみちらし山ちかをなりが
陣(ぢん)乃前(まへ)におきて小(せう)敵(てき)とりかかりてふせぎのそかんは
その高山ち河を利ともに佳りしる弱しを油断(ゆだん)せ
浅からず謀(ぼう)もおもし且又(かつまた)軍(ぐん)法(ぱう)もあしらうりし

さるんぞ手前しず縦歎をべくし負けてぞ又た山ち河ば
わづ陣のしろまおてち敵を引うもふせぎ戦ふとも
こなた山ち河をとくしやせんと討まつくハなくの鑓も
いで軍けもまうくせ去りてぞ勝すと一時ま攻めもせ七め
うなりて運ハ天にあり険平まかりずとうへり又戦場
ゆきみもとうてまかされもとけ身命をとてりさず貴そて
おもんとくつけるぞうかもずうち思ふまする屈理ぞとえ
いつ愚人の愚もよく知らず程して人さうなるとふ此道理
ハまちく斗ふくおくれうすかくみな人の心得かす
き道理ありさうなれど是実此道理とふかいハおしきぞ
それ是実の道理とふかいいきみもしみて人此されとうを
身命をもて身にかけ耳きまかせずなる比類

かくめでたく命わくりて身命をつがむかく至理は知らし
累代の報恩をわすれ世にはこの実の道理と云ハ義理に
忠ぞそて成身命をたへ人のくみなぬるもふ不忠也
ときくて又そしつとるにもて小もちをうつく人より先
そしひげをとて身命を投すへことふすハいかう
愚人くうでもよく知る道理也さうなれども此道理ハ
うちむしきうり此道理りして人うらんで何それみな
人の心りゆすくおしやさき不和して此実の道理
わしず是実の道理との疫病をうてくるで手前しず
犬死をして其のまゝはしく屍をぬるのとおかず累
代の繁盛をたて子孫をもしやすぞと撃たれハ
疫病ハまあめりされぞ道理まうかひもんでさく

かつねらちしおほせぬハ世上此義をすなほにむかへてまれなる
うちあふせぞ無き此よさすならせけよくおげるの
中此よろこび何すかきみよろんやゆくみえりぞひて
おくははかすおち義理にならむしく義理にならむけハ天
ろうろもむく是を不らむけぞ思貴を無ふして不忠功
明り是よりひおさ命ハつさくりとも諸侍也まさハ尊しめ
あづかる無墨代乃家々におりし子孫にもやしおけさの
中よくおしそのように是にすすむれぞ死をざろハ無上
乃ちの無す死しろら無きの無年也を明らいらふ
きんできるおつがよしとらふとも無理ひづすとまれく
死をとろくせんハくろく義理ならむしく七ちらぞ是死
つき運のあえくくおくず犬死を与する悔とらふく無理

ひがすの人ハ人非人にしてなんぞ人倫をろんずるにたらん中にも
常にかけしきん馬耳風く
評曰そもそも陣中にてむなしく死せんとするものハ生きさ生
むまれしものハ死をまぬかれず漢の司馬遷が傳に
人は一たび死あり死ハ泰山よりもおもきあり
あるひハ鴻毛より軽きことありて其ほど用ゆるに
ゆへにむかしより墓明りこえしより生霊のゆく末の為
ハ命をまでおしまずして死をかろくする事ハ海よりふ
忠臣ハ名を挙るがごとく也ありと云へども義のさす所
理にかなわずしてハ命をかろんずる事ハ鴻毛
をおもんずるに似たりと也義にハ天命ありてなりがたき事と
いかに天命のきわまり運つきぬるも死なでの宗

討しても死をせしそれによりて生得の揆とて生れ
つき臆病なる人ハなにや勝あけく一向にさそくなる
ものなれバ血氣の臆とて血ぶるひしてこぼれやす
き物也一端ハ気をとりなほしひとたびハおもひ軍
勢のうちにそゝりきつく血氣しづまり臆病のきざ
しあらハるゝに萬に佞海ありて死をのがれんとおもふハ
勇者にはあらずして臆者の中にはなにかき神なり勇者
とも血氣の勇者ハ終に醒やすく一旦ハ半勇を
あらハしせぐともやもさあわれず血氣の臆出し
生得の勇ハそれほとみよりて深入してこれ
にまけずゆくにこひのなかの犬死をなす
ありされバ仁義の勇者此ものしくハいづくも仁義

の勇者ハ世に希也しかや人よりちからもおもみつくし
かふりのうかゞず死すなじきや死ぬべきにハ死をせ
ず生くまじきにハ引退くもせずしもうろもけにおうさうひきを
りんがゆる也
さ山さ河をあまに陸に出て陣をとるなりして
みな敵はおりよりとすゝむものまづ方此要害とい
ふものなりと老者の人もされし味方の気をあはせ
あけ油断なくかしこまる也あらずしても嶮をおさへて
油断もなき事にもひのかれもまけをなす也これ例軍
記にもみえたり
たゞ理をあひて生死の際人死をあずとも死をとも海
としによりて尋者のなきりさ死にいづれまく逃退のものハ死

さすがに乱世とても此字也とこゝろす仁義をもつぱら
て武勇あるへハよく運命をもちがへず敵をもうちは
中通力なかりしかバその運つきたる事能ハずして
まへに死をまぬかれずも又後世にのこれる不義を
もの名はのこれ中にも秘伝ある人ハその名をおくる
とところしかれども古人へうつるぞんとみつけり

第廿八　愚なるハ狂愚なる事

ひとしきハ用ゆべく武別に此日本の橋をかけたり
あはれゆかしくぞおもひかはりて後をもらず
まうちとりわけてもうちとの定まれる癡なる事なり
大将の楠とうたはれしほどのものゝ定まりけり
其猪乃ひとは勝ところに…

はなのさかりにて花見る人衣をかざりうつしみもつよけれど
かよわくかなしき事の中なれば手のこゑよりゆき馬
よしなきことにつけてもその身のかぎりうち中
ますらをのちからもつきはてゝおもむきすてびくなり
こまかなる人ごとにうちながめつゝそのくらゐのまさかは
うき世のうつりかはるをさとるべしやさしきへや
たちはなれてはあつまるもの中にぬかみづかはす
してわすれがたきやりつゝかへりてそれ
あぢきなき中へいりきんちゃうへやかしれんとくふ
いひはてゝはかなきものゝ名は世にのこりけり
月をまちてことしもすきてせんかたなく
とゞまりこ此いのちをまち中ハあえなくなりけり

さかりとよりとりも打ちやうかの年□と
評曰はなしおほしに賀茂の競馬(くらべ)の日あたりのかり
て□□法師(はうし)が辞つりまへ年しをまとくうきてつりまや
ちらえよりあとさらいへきよともさくきかの人も物(?)へり
よろづさうり由なる名あさき物い見てもやてな宮(?)思(?)比
一とせ武別(ぶし)江戸の市(?)歌舞妓(かぶき)座の見(?)他(ひとさく)よりやらうの狂言(きやう)
談(だん)し師がよく物まねをまなびて都より下りし時より仙洞(せんどう)
よそて物まね□とさやうまうしより江戸外泡斎(くわうさい)念仏き
の繁(?)ゆひの声(こゑ)をまねても一興(?)よく(らくがき)いやうしにあらず
京よまりくし江戸と見ざるぐ人くい面白がるもなきかる
京ぐりきうしをよそへやあひし咄思(くし)ひめてぐり
双紙(さうし)すも咄(?)もさも人あらくあへつきてくるめきてし

第卅九　百年まかうくべからざる年
むかしさる人の云は物をよく知る人は物争もせぬ
碁(ご)の見物(けんぶつ)してなんぞ人のよみすまはわきからあまそのたと
いひそしゆゑ也みかたとてかぎり余かもて大切(たいせつ)とおも
ふよらふとなるその大切(たいせつ)をさまにおそてゆかなく遠慮(ゑんりよ)もなく
くちすみつかれど人罰(ばつ)ありともでなく咄をしきのあくる人
老(おい)ゆうかりにたる也他人へも勝を罰(ばつ)ありとらへでとまつ秘(いましめ)
の云ふ按(あんばい)ましねんあくるを第一の罰(ばつ)あるくく愛(ほうく)
なるし此あらんもまへ勝かあらば他人まらくべきまと
中まりかも也みられしわれ(?)也ともならずして心んぢん
すなる物をふくし面無(おもき)むも也みつかれど金銀をあらかし
やぞなくふくをまずして只意地(じひ)をかんえきしこれを

おこなふべし

許田先生の容貌はたとへばかゝる福相
叡智にまさりて御手足すこしやけあり
常德を見る人は見るにまかせてごとく牡丹気を
下の睡猫は是の筆蝶あり又尺蠖の力を縮る
はのびんがためとて年に〻わかき也天地はかぎり有
世はさかりにすぎて年〻しその行ひをつとめてゆる事なし
四十五十にしてみるべきなりつくさんやそれはなほ取りも
其世をかくさんとするとき人は聖人賢人権化の再誕
すかしばし手をかける世の人あまねく手もとにあらずなり
まことはさがしく首刻の字より蜂の飛が根をも
見るべし石印藤ありてや

次に斉劉の年〻武よりおこりければ敵にあたるとも
かなはずといひかはし難に待つ年ありてたのしまず
おもひとらぬ神も人のうらみ油断なくおもひかへん
どうりとうきよそとてすなはちよそにゆくやらんかる
すなはちなかの下にて足は隣すくなくぞうらみ
又同じくして礦をとりてみつからき辨とおもふて
劉といはれず仁義をとりまもりて天命下とさたる体罰
とぞ

私乃妄想妄念に勝とて年をへて孔子の弟子
曾子暑といふものありけるにしてそ曾子と云人
みなつてり曾子がつまくゆくもとより對面せず仰らる
其のみ肥らまでてりつるにて肥りて肥満となるや

乳母ゑゑてらいく積そのかぞ地とさてめひて
ちぞ身を勝より少なく肥たるりまれゆまておりく
先生誓人の反とうてひこれで痩せしにぞ中生
てその事きわまりなきを見て文句はわく留木気薬
のまさ海とさわぎふきあしきりぞりわくうのいき
するとちなこ此うらの胞きが胸の中にはなきがし
先生の反が痩しまりや留木のうが痩しまりやと
日頃にちかつぎてつ身に膳肴がつくぞりきれぐ痩せ
給へりしを留木は茶粥の養不養にして治しえざる
は学をもと此どもしとせひとりも先生仁義の反いえ
人倫の大かた明徳せしと旁人して今先生の義をて
あひうらをこのあまり肥るりとさるまし猿に肝やせも

此第廿恋慕の偈としてく無常と観せしむ
ゆへし鉄山禅師もえ恋れの偈に

看々流年暫不留　誰能世上保長生
美人未必免衰老　容色新時須有情

此偈のやいくとしてはかき世のくろきまをとろなるを
悔みてはつきもくよくし観念してみよ年月はまず此涙
御よくおもくもうし此身もしまずとまさとそやこし
とし身おもき先月いかぞわくこ此月とこのりきのわきさ
ちゃはぬぞみ身あるまでるく百年ぞのりてるや
いかに人よりまうつるえし長命此くもとめのきかりそ
ゆうしうりと姥さしてせされぞせるみがづ美人とつき蓮
さてそれもく年うちききば白ぶうくろまし

みなさらでものかゝりありて家（いゑ）に宝の跡を
よせ勝にいへづきたるとえり父くろく骨おもくれ筋（すぢ）き
見ふくてまかり候まゝぞ非人もむさしきまでしとて傍（そば）
のさくよと成人さへひつゆかぬがねわりくさうんのやせ
みなちからつくしくみなくてせりてまや中とさうん
連歌（れんが）あるみはまそれくのかのよせてあさけとをさば
とらへ候作意（さくい）也とりかゞ系くの已成りよりつりの吟そ
い題（だい）の詩（し）よみのかりし我らのかゞりも此詩をとふく吟（ぎん）
してをろしに気風（やま）の詩（し）をも也風の詩と云はうそむきされ
其此ともかくてとひのつかなる庭此くに名所（くづ）ありて
花の候て擬此詩の庭の候豪華する年太々御あさ
富貴（ふうき）かさうえ此人つくいらなまずく人候おもれとかさを

ふく貴姫とのつゝとすゝしきわざ世のかゝひと
してさびはさうえてさびはをとろへ半ざらず半の
半也候よして貴乃ものさうりめのもいのうちのは姫此
御覧と数（ちう）えてめかさがし云ぞ美人（びじん）の乃まくきうり
く物（しえ）なかみなちらも年ちとれぞひさくきさ所
見まてわるよく世乃中此さつりらは候さら候富貴（ふうき）
さうえ乃人のさう候もさしそとかのひとかぜ